

並列接続できる調整可能な 1.1Aシングル抵抗 低損失レギュレータ

特長

- 内部バラスト抵抗によってパワー・プレーンに直接接続できるため、高電流と熱拡散が可能
- 出力電流: 1.1A
- 1本の抵抗で出力電圧を設定
- SETピン電流の初期精度: 1%
- 0Vまで調整可能な出力電圧
- 低出力ノイズ: 40 μ V_{RMS} (10Hz~100kHz)
- 広い入力電圧範囲: 1.2V~36V
- 低ドロップアウト電圧: 350mV
- <0.001%のライン・レギュレーション
- 最小負荷電流: 0.5mA
- セラミック出力コンデンサ(最小2.2 μ F)で安定
- フォールドバック付き電流制限および過熱保護機能
- 8ピンMSOPおよび3mm×3mm DFNパッケージ

アプリケーション

- 完全表面実装型高電流電源
- 高効率リニア・レギュレータ
- スイッチング電源用ポスト・レギュレータ
- 部品数の少ない可変電圧電源
- 低出力電圧電源

概要

LT[®]3080-1は、バラスト抵抗を内蔵することによって、PC基板のトレース抵抗を使用せずにデバイスを直接並列接続できる1.1A低ドロップアウト・リニア・レギュレータです。内部バラスト抵抗により、複数のデバイスを表面実装基板上で直接、並列接続できるので、シンプルで容易な基板レイアウトを維持しながら、出力電流と電力損失を増加させることが可能になります。また、このデバイスはパス・トランジスタのコレクタが外に取り出されているので、複数の入力電源と一緒に使用すると、最小350mVの低ドロップアウト動作が可能です。

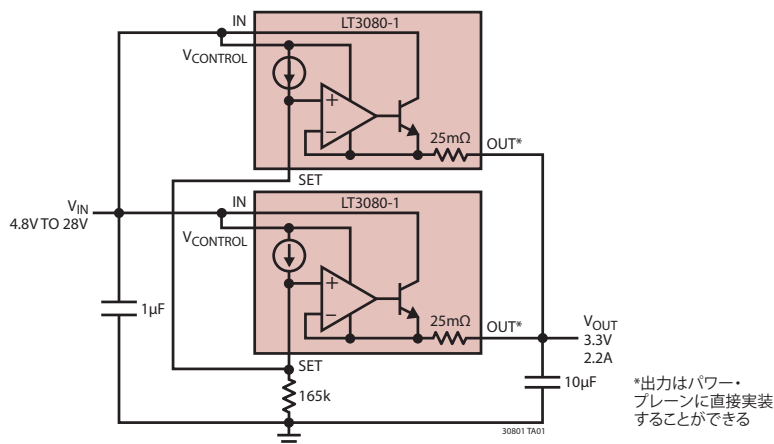
LT3080-1は、広い出力電圧範囲が可能です。1本の抵抗を介してリファレンス電流を使用することにより、出力電圧は0~36Vのあらゆるレベルに設定されます。LT3080-1は、他のレギュレータで一般的に行われるESRの追加なしに、2.2 μ Fのセラミック出力コンデンサで安定します。

内部保護回路は電流制限、熱制限などを行います。LT3080-1レギュレータは(熱特性を改善するための露出バッド付きの)8ピンMSOPパッケージと3mm×3mm DFNパッケージで供給されます。

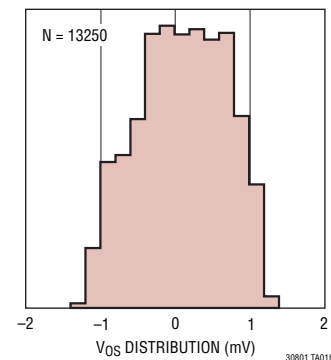
LT、LT、LTC、LTM、Linear TechnologyおよびLinearのロゴはリニアテクノロジー社の登録商標です。VLD0とThinSOTはリニアテクノロジー社の商標です。その他すべての商標の所有権は、それぞれの所有者に帰属します。

標準的応用例

レギュレータの並列接続



オフセット電圧の分布



LT3080-1

絶対最大定格 (Note 1) 全ての電圧はV_{OUT}を基準

V _{CONTROL} ピンの電圧.....	40V、-0.3V
INピンの電圧.....	40V、-0.3V
SETピンの電流 (Note 7).....	±10mA
SETピンの電圧 (OUTを基準).....	±0.3V
出力短絡時間.....	無期限

動作接合部温度範囲 (Note 2、10)	
E、Iグレード.....	-40°C~125°C
保存温度範囲.....	-65°C~150°C
リード温度 (半田付け、10秒)	
MS8Eパッケージのみ.....	300°C

ピン配置



発注情報

鉛フリー仕様	テープアンドリール	製品マーキング*	パッケージ	温度範囲
LT3080EDD-1#PBF	LT3080EDD-1#TRPBF	LDPM	8-Lead (3mm × 3mm) Plastic DFN	-40°C to 125°C
LT3080IDD-1#PBF	LT3080IDD-1#TRPBF	LDPM	8-Lead (3mm × 3mm) Plastic DFN	-40°C to 125°C
LT3080EMS8E-1#PBF	LT3080EMS8E-1#TRPBF	LTDPN	8-Lead Plastic MSOP	-40°C to 125°C
LT3080IMS8E-1#PBF	LT3080IMS8E-1#TRPBF	LTDPN	8-Lead Plastic MSOP	-40°C to 125°C
鉛ベース仕様	テープアンドリール	製品マーキング*	パッケージ	温度範囲
LT3080EDD-1	LT3080EDD-1#TR	LDPM	8-Lead (3mm × 3mm) Plastic DFN	-40°C to 125°C
LT3080IDD-1	LT3080IDD-1#TR	LDPM	8-Lead (3mm × 3mm) Plastic DFN	-40°C to 125°C
LT3080EMS8E-1	LT3080EMS8E-1#TR	LTDPN	8-Lead Plastic MSOP	-40°C to 125°C
LT3080IMS8E-1	LT3080IMS8E-1#TR	LTDPN	8-Lead Plastic MSOP	-40°C to 125°C

さらに広い動作温度範囲で規定されるデバイスについては、弊社または弊社代理店にお問い合わせください。*温度グレードは出荷時のコンテナのラベルで識別されます。

鉛フリー仕様の製品マーキングの詳細については、<http://www.linear-tech.co.jp/leadfree/> をご覧ください。

テープアンドリールの仕様の詳細については、<http://www.linear-tech.co.jp/tapeandreeel/> をご覧ください。

電気的特性

●は全動作温度範囲の規格値を意味する。それ以外は $T_A=25^\circ\text{C}$ での値。

PARAMETER	CONDITIONS	MIN	TYP	MAX	UNITS
SET Pin Current	I_{SET} $V_{IN} = 1\text{V}, V_{CONTROL} = 2.0\text{V}, I_{LOAD} = 1\text{mA}, T_J = 25^\circ\text{C}$ $V_{IN} \geq 1\text{V}, V_{CONTROL} \geq 2.0\text{V}, 1\text{mA} \leq I_{LOAD} \leq 1.1\text{A}$ (Note 9)	9.90 9.80	10 10	10.10 10.20	μA μA
Output Offset Voltage ($V_{OUT} - V_{SET}$)	V_{OS} $V_{IN} = 1\text{V}, V_{CONTROL} = 2\text{V}, I_{OUT} = 1\text{mA}$	-2 -3.5		2 3.5	mV mV
Load Regulation	ΔI_{SET} ΔV_{OS} ΔV_{OS} $\Delta I_{LOAD} = 1\text{mA}$ to 1.1A $\Delta I_{LOAD} = 1\text{mA}$ to 1.1A (Note 8) $\Delta I_{LOAD} = 1\text{mA}$ to 1.1A (Note 8)		-0.1 27.5	34 48	nA mV mV
Line Regulation (Note 9)	ΔI_{SET} ΔV_{OS} $V_{IN} = 1\text{V}$ to 22V, $V_{CONTROL} = 1\text{V}$ to 22V, $I_{LOAD} = 1\text{mA}$ $V_{IN} = 1\text{V}$ to 22V, $V_{CONTROL} = 1\text{V}$ to 22V, $I_{LOAD} = 1\text{mA}$		0.1 0.003	0.5	nA/V mV/V
Minimum Load Current (Notes 3, 9)	$V_{IN} = V_{CONTROL} = 10\text{V}$ $V_{IN} = V_{CONTROL} = 22\text{V}$		300	500 1	μA mA
$V_{CONTROL}$ Dropout Voltage (Note 4)	$I_{LOAD} = 100\text{mA}$ $I_{LOAD} = 1.1\text{A}$		1.2 1.35	1.6	V V
V_{IN} Dropout Voltage (Note 4)	$I_{LOAD} = 100\text{mA}$ $I_{LOAD} = 1.1\text{A}$		100 350	200 500	mV mV
CONTROL Pin Current	$I_{LOAD} = 100\text{mA}$ $I_{LOAD} = 1.1\text{A}$		4 17	6 30	mA mA
Current Limit	$V_{IN} = 5\text{V}, V_{CONTROL} = 5\text{V}, V_{SET} = 0\text{V}, V_{OUT} = -0.1\text{V}$	1.1	1.4		A
Error Amplifier RMS Output Noise (Note 6)	$I_{LOAD} = 1.1\text{A}, 10\text{Hz} \leq f \leq 100\text{kHz}, C_{OUT} = 10\mu\text{F}, C_{SET} = 0.1\mu\text{F}$		40		μV_{RMS}
Reference Current RMS Output Noise (Note 6)	$10\text{Hz} \leq f \leq 100\text{kHz}$		1		nA _{RMS}
Ripple Rejection	$f = 120\text{Hz}, V_{RIPPLE} = 0.5\text{V}_{P-P}, I_{LOAD} = 0.2\text{A}, C_{SET} = 0.1\mu\text{F}, C_{OUT} = 2.2\mu\text{F}$ $f = 10\text{kHz}$ $f = 1\text{MHz}$		75 55 20		dB dB dB
Thermal Regulation, I_{SET}	10ms Pulse		0.003		%/W

Note 1: 絶対最大定格に記載された値を超えるストレスはデバイスに永続的損傷を与える可能性がある。長期にわたって絶対最大定格条件に曝すと、デバイスの信頼性と寿命に悪影響を与える可能性がある。

Note 2: 注記がない限り、すべての電圧は V_{OUT} を基準にしている。LT3080-1は T_J が T_A にほぼ等しいパルス負荷条件でテストされ、仕様が規定されている。LT3080E-1は $T_A = 25^\circ\text{C}$ でテストされる。LT3080E-1の -40°C ~ 125°C の全動作温度範囲での性能は、設計、特性評価および統計学的なプロセス・コントロールとの相関で確認されている。LT3080-1は -40°C ~ 125°C の全動作接合部温度範囲で保証されている。

Note 3: 最小負荷電流はデバイスの消費電流に相当する。全ての静止電流とドライブ電流はデバイスの出力に供給されるので、最小負荷電流は安定化を維持するのに必要な最小電流である。

Note 4: LT3080-1の場合、ドロップアウトは最小制御電圧($V_{CONTROL}$)または最小入力電圧(V_{IN})のどちらかによって生じる。両方のパラメータとも出力電圧を基準にして仕様が規定されている。仕様はレギュレーションを維持するのに必要な入力から出力への最小電圧差を表す。

Note 5: CONTROLピンの電流は出力トランジスタに必要なドライブ電流である。この電流はおよそ1:60の比で出力電流をトラッキングする。最小値はデバイスの消費電流に等しい。

Note 6: 出力ノイズは電圧設定抵抗の両端に小さなコンデンサを追加すると減少する。このコンデンサの追加により、電圧設定抵抗のショット・ノイズとリファレンスの電流ノイズがバイパスされ、出力ノイズは誤差アンプのノイズに等しくなる(「アプリケーション情報のセクションを参照」)。

Note 7: SETピンはダイオードにより出力にクランプされる。これらのダイオードには過渡的過負荷でだけ電流が流れる。

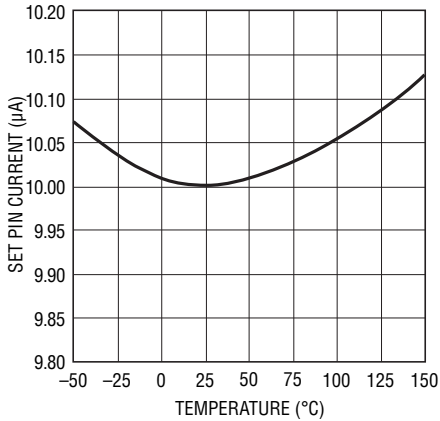
Note 8: 負荷レギュレーションはパッケージのところでケルビン検出される。

Note 9: 電流制限は22Vより大きな入出力間電圧差($V_{IN}-V_{OUT}$)ではゼロに低下することがある。入力電圧と出力電圧の差が規定された電圧差($V_{IN}-V_{OUT}$)より下である限り、 I_{IN} と $V_{CONTROL}$ の両方の電圧での動作は、36Vの最大値まで許容される。ライン・レギュレーションとロードレギュレーションの仕様は、デバイスが電流制限状態のときは適用されない。

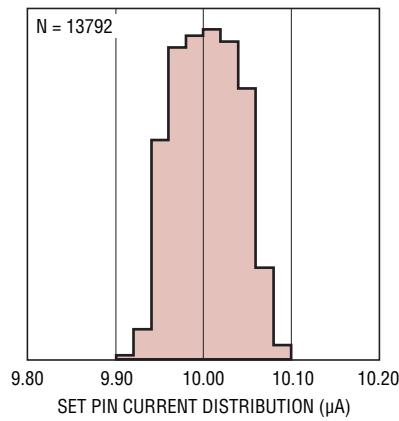
Note 10: このデバイスには短時間の過負荷状態の間デバイスを保護するための過熱保護機能が備わっている。過熱保護がアクティブなとき、接合部温度は最大動作接合部温度を超える。規定された最大動作接合部温度を超えた動作が継続すると、デバイスの信頼性を損なうおそれがある。

標準的性能特性

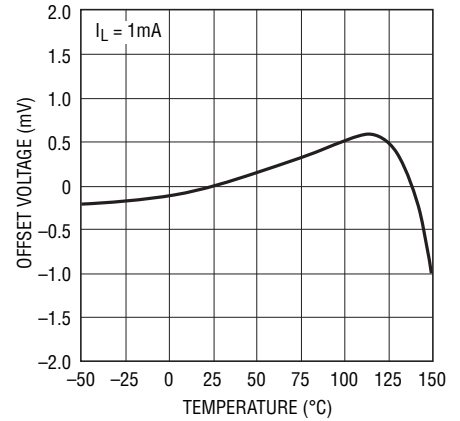
SET ピンの電流



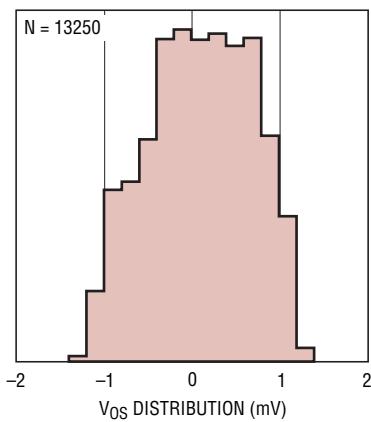
SET ピンの電流の分布



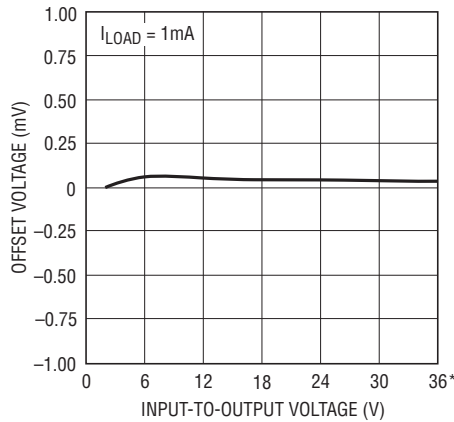
オフセット電圧 ($V_{OUT} - V_{SET}$)



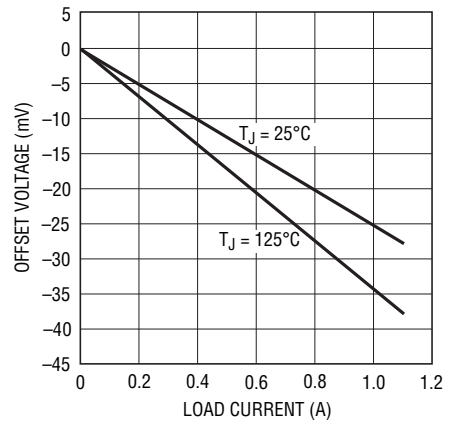
オフセット電圧の分布



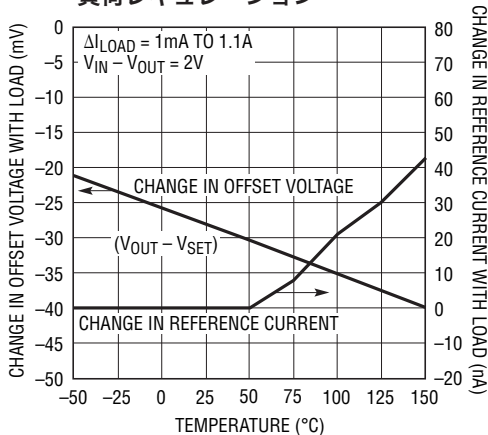
オフセット電圧



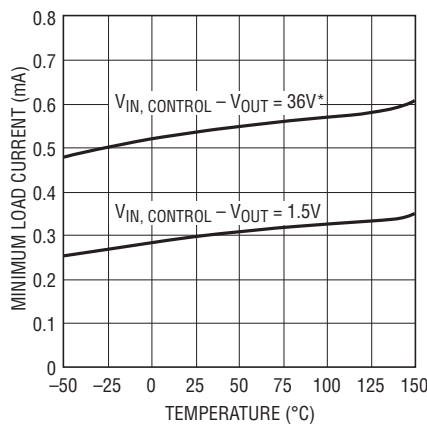
オフセット電圧



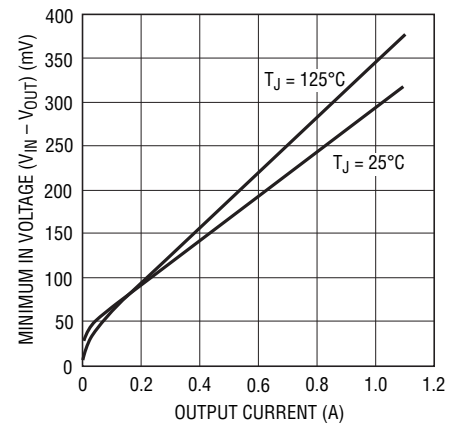
負荷レギュレーション



最小負荷電流



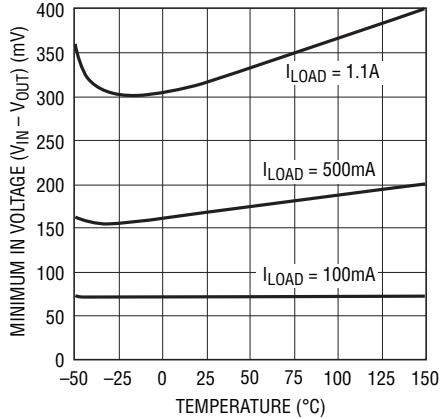
ドロップアウト電圧 (最小IN電圧)



*「電気的特性」の表のNOTE 9を参照。

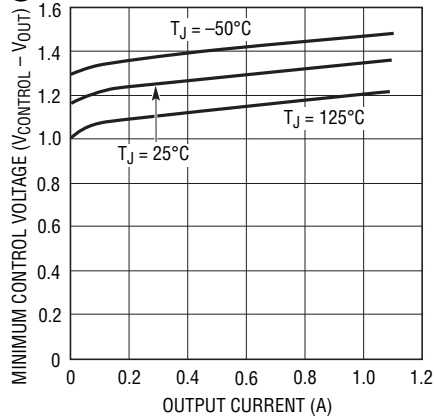
標準的性能特性

ドロップアウト電圧
(最小 V_{IN} 電圧)



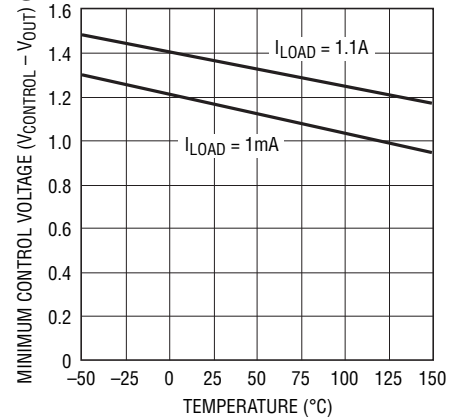
30801 G10

ドロップアウト電圧
(最小 $V_{CONTROL}$ ピン電圧)



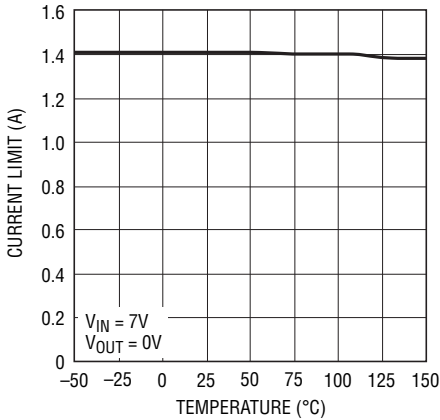
30801 G11

ドロップアウト電圧
(最小 $V_{CONTROL}$ ピン電圧)



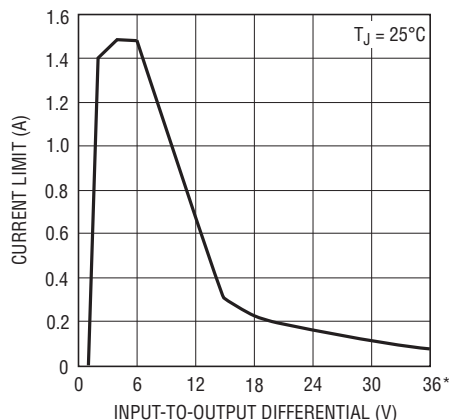
30801 G12

電流制限



30801 G13

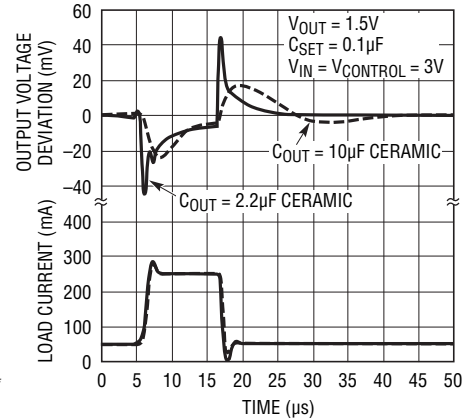
電流制限



30801 G14

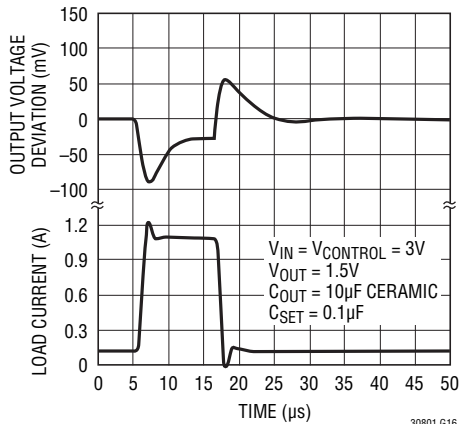
*「電氣的特性」の表のNOTE 9を参照。

負荷過渡応答



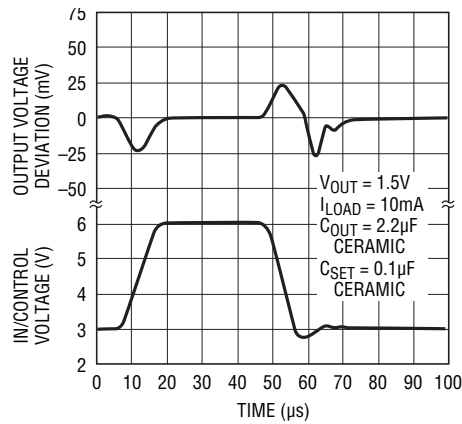
30801 G15

負荷過渡応答



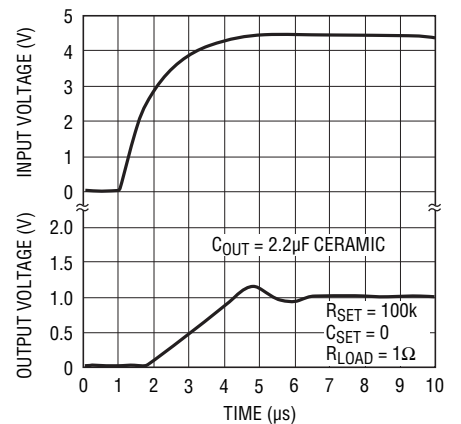
30801 G16

ラインの過渡応答



30801 G17

ターンオン応答

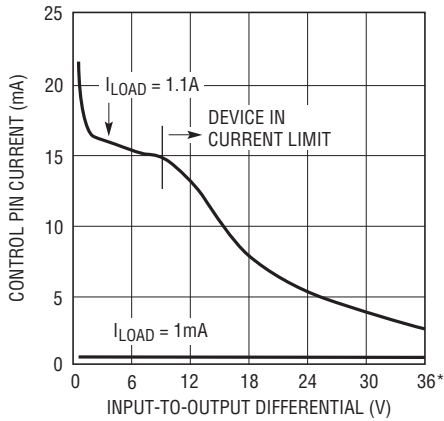


30801 G18

30801fb

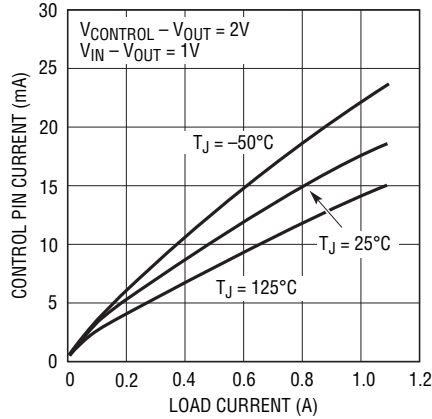
標準的性能特性

V_{CONTROL}ピンの電流



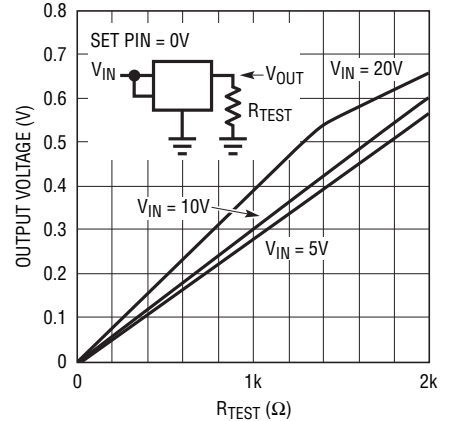
*「電気的特性」の表のNOTE 9を参照。 30801 G19

V_{CONTROL}ピンの電流



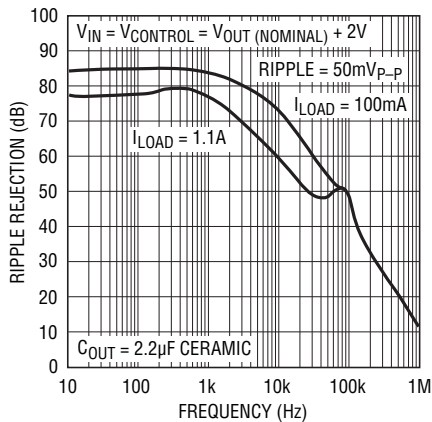
30801 G20

最小負荷より小さい負荷の残留出力電圧



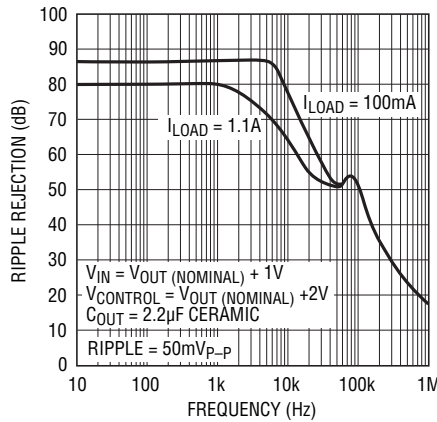
30801 G21

リップル除去 - 単一電源



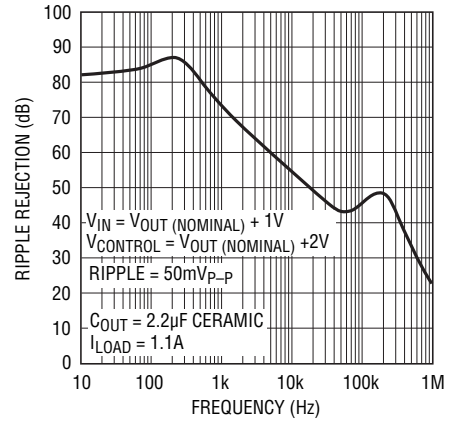
30801 G22

リップル除去 - 両電源 - V_{CONTROL}ピン



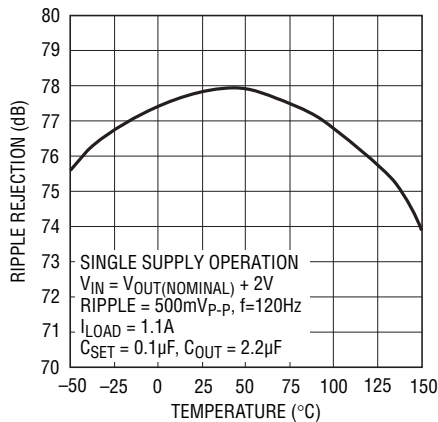
30801 G23

リップル除去 - 両電源 - INピン



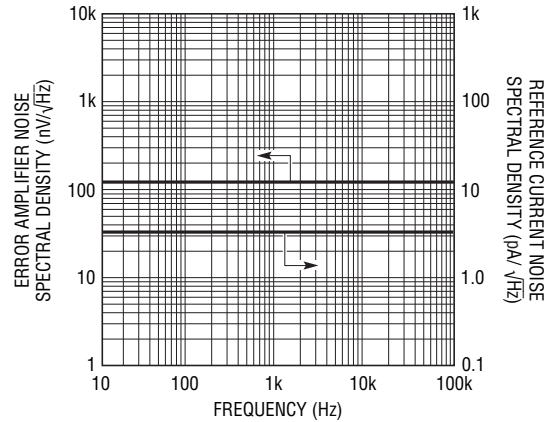
30801 G24

リップル除去 (120Hz)



30801 G25

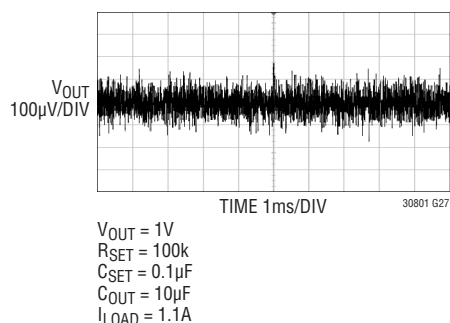
ノイズ・スペクトル密度



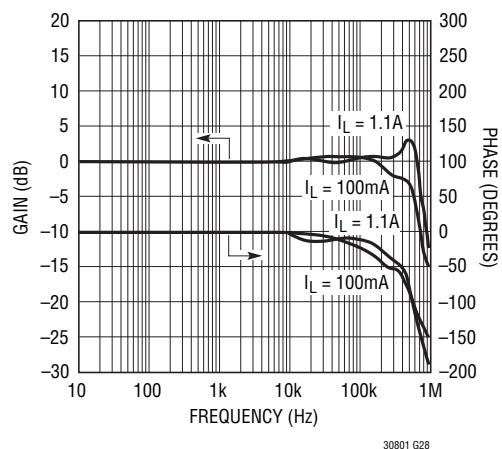
30801 G26

標準的性能特性

出力電圧ノイズ



誤差アンプの利得と位相



ピン機能 (DD/MS8E)

V_{CONTROL} (ピン5/ピン5): このピンはデバイスの制御回路の電源ピンです。このピンに流れ込む電流は出力電流の約1.7%です。デバイスが安定化を行うには、この電圧は出力電圧より1.2V~1.35V以上高くなければなりません(ドロップアウトの仕様を参照)。

IN (ピン7、8/ピン7、8): これはLT3080-1のパワー・デバイスのコレクタです。出力負荷電流はこのピンを通して供給されます。デバイスが安定化を行うには、この電圧は出力電圧より0.1V~0.5V以上高くなければなりません(ドロップアウトの仕様を参照)。

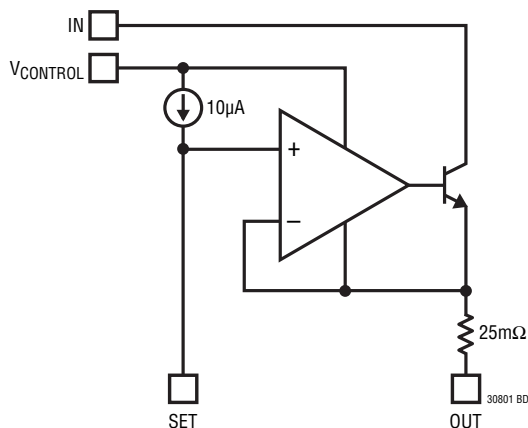
NC (ピン6/ピン6): 接続なし。NCピンは内部回路に接続されておらず、V_{IN}、V_{CONTROL}、V_{OUT}、GNDのどれにでも接続することができ、またはフロートさせておくことができます。

OUT (ピン1~3/ピン1~3): これはデバイスの電力出力です。1mAの最小負荷電流が必要です。最小負荷電流がないと、出力が安定化されないことがあります。

SET (ピン4/ピン4): このピンは誤差アンプへの入力で、デバイスのレギュレーションの設定ポイントです。10µAの固定電流がこのピンから1個の外部抵抗を通して流れ出し、デバイスの出力電圧をプログラムします。出力電圧の範囲はゼロから絶対最大定格出力電圧までです。SETピンからグラウンドに小さなコンデンサを追加して、過渡性能を改善することができます。

露出パッド (ピン9/ピン9): MS8EパッケージとDFNパッケージのOUT。

ブロック図



アプリケーション情報

LT3080-1レギュレータは使いやすく、高性能レギュレータに期待される全ての保護機能を備えています。サーマル・シャットダウンに加えて、短絡保護と安全動作範囲保護が含まれています。

LT3080-1は複数のレールを必要とするアプリケーションに特に適しています。新しいアーキテクチャにより、簡単な並列動作とヒートシンクなしの熱管理が可能になるだけでなく、1個の抵抗でゼロまで調節可能なので、最新の低電圧デジタルICを扱えます。「ゼロ」出力への調節により、給電される回路をオフし、(5Vや3.3Vの入力電源のように)入力が予め安定化されているときは外部抵抗が熱拡散に役立ちます。

温度係数がゼロの高精度10µA内部電流源がパワー・オペアンプの非反転入力に接続されています。パワー・オペアンプは非反転入力の電圧を低インピーダンスのバッファされた出力として与えます。非反転入力からグランドへの1個の抵抗が出力電圧を設定し、この抵抗がゼロに設定されると、ゼロ出力になります。見てのとおり、ゼロから入力電源によって定まる最大電圧まで任意の出力電圧を得ることができます。

このアーキテクチャからそれほど明らかではないことは、従来のレギュレータのブートストラップされたリファレンスとは異なり、真の内部電流源をリファレンスとして使用する利点です。真の電流源により、レギュレータは正入力のインピーダンスに依存しない利得と周波

数応答を得ることができます。LT1086のような従来の可変レギュレータでは、出力電圧によってループの利得が変化し、調節ピンがグランドにバイパスされていると帯域幅が変化します。LT3080-1の場合、ループの利得は出力電圧の変化やバイパスによって変化しません。出力の安定化は出力電圧のパーセンテージで固定されるのではなく、ミリボルトで表される固定された値です。真の電流源の使用により、バッファ・アンプの全利得を安定化のために使うことができ、その利得をリファレンスをもっと高い出力電圧に増幅するために使う必要は全くありません。

LT3080-1はバラスト抵抗も内蔵しているので、PCボードのトレース抵抗や検出抵抗を必要とせずにデバイスを直接並列接続できます。この内部バラスト抵抗により、複数のデバイスを表面実装基板上で直接、並列接続できるので、シンプルで簡易な基板レイアウトを維持しながら、出力電流と電力損失を増加させることができます。出力電流を上げるためさらに多くのレギュレータを追加するのは難しくありません。デバイスの入力を全て一緒に結線し、全てのデバイスの出力を直接一緒に結線し、全てのデバイスのSETピンを直接一緒に結線します。内部バラスト抵抗により、デバイスは自動的に負荷と電力損失を分担します。

LT3080-1の出力トランジスタのコレクタは制御入力とは別のピンに接続されています。コレクタ(INピン)のドロップアウトはわずか300mVなので、2個の電源を使ってLT3080-1に給電し、電力損失を減らすことができます。

30801fb

アプリケーション情報

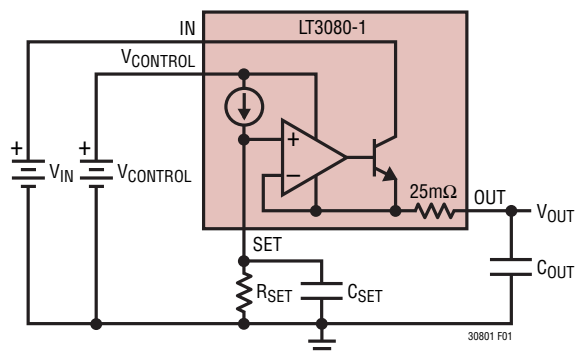


図1. 調節可能な基本レギュレータ

電圧の高い方の電源を制御回路に使い、電圧の低い方の電源をコレクタに使用します。これにより、効率が向上し、電力損失が減少します。熱をさらに拡散させるため、抵抗をコレクタに直列に挿入し、熱の一部をデバイスから逃がしてPCボードに拡散させます。

LT3080-1は2つのモードで動作させることができます。3端子モードでは制御ピンが電力入力ピンに接続されるので、ドロップアウトが1.35Vに制限されます。代わりに、「制御」ピンをもっと高い電圧に接続し、電力INピンをもっと低い電圧に接続することができ、INピンのドロップアウトを300mVにして電力損失を最小に抑えることができます。これにより、2.5Vの V_{IN} から1.8Vの V_{OUT} または1.8Vの V_{IN} から1.2Vの V_{OUT} に安定化する1.1Aの電源が低電力損失で可能になります。

出力電圧

LT3080-1は10 μ Aのリファレンス電流を発生し、この電流はSETピンから流れ出します。SETからグラウンドに抵抗を接続すると、誤差アンプの基準点になる電圧を発生します(図1を参照)。リファレンス電圧は正確にSETピンの電流と抵抗値の積です。任意の電圧を発生させることができるので、レギュレータには最小出力電圧はありません。レギュレーションを維持するには、出力電圧に関係なく1mAの最小負荷電流が必要です。真のゼロ電圧出力の動作の場合、この1mAの負荷電流を負電源電圧に戻す必要があります。

リファレンス電圧を発生するのに使われる電流は低レベルなので、SETピンへの、またはSETピンからのリーク電流が、リファレンス電圧と出力電圧に誤差を生じることがあります。高品質の絶縁を施します(たとえば、テフロ

ン、Kel-F)。おそらく、絶縁表面を洗浄してフラックスや他の残留物を除去する必要があります。湿度の高い環境では、湿気を防ぐため表面をコーティングする必要があるかもしれません。

SETピンと回路をSETピンの電位に近い電圧を与えたガードリングで取り囲むことにより、基板のリーク電流を最小に抑えることができます。ガードリングはOUTピンに接続します。回路基板の両側をガードする必要があります。バルク・リーク電流の減少はガードリングの幅に依存します。SETピンに流れ込む、またはSETピンから流れ出す10ナノアンペアのリーク電流と、関連した回路によりリファレンス電圧に0.1%の誤差が生じます。この大きさのリーク電流は、他のリーク電流源と結合して、特に可能な動作温度範囲にわたってかなりのオフセット電圧とリファレンスのドリフトを生じることがあります。

ガードリングの手法を用いると、このSETピンの浮遊容量が増大します。SETピンは高インピーダンス・ノードなので、不要の信号がSETピンに結合して不安定動作を引き起こすおそれがあります。これは最小出力コンデンサを使って最大電流で動作しているとき最も顕著になります。これを改善する最も簡単な方法は、小さな容量をSETからグラウンドに接続してSETピンをバイパスすることです。10pF~20pFで十分です。

安定性と出力容量

LT3080-1は安定性のために出力コンデンサを必要とします。このデバイスはESRの非常に小さなコンデンサ(一般にセラミック、タンタルまたは低ESRの電解コンデンサ)で安定するように設計されています。発振を防ぐため、ESRが0.5 Ω 以下の最小2.2 μ Fの出力コンデンサを推奨します。出力容量の値を大きくすると、負荷電流の大きな変化に対してピーク変動が減り、過渡応答が改善されます。LT3080-1によって電流を供給される個々の部品をデカップリングするのに使われるバイパス・コンデンサにより、出力コンデンサの実効値が増加します。

過渡性能を改善するため、電圧設定抵抗の両端にコンデンサを接続します。1 μ Fまでのコンデンサを使うことができます。このバイパス・コンデンサによって、システム・ノイズも減少しますが、起動時間は電圧設定抵抗(図1の R_{SET})とSETピンのバイパス・コンデンサの時定数に比例します。

アプリケーション情報

セラミック・コンデンサを使用するには特に配慮が必要です。セラミック・コンデンサは様々な誘電体を使って製造されており、それぞれ温度や加えられる電圧によって動作が異なります。最も広く使われている誘電体は、Z5U、Y5V、X5RおよびX7RのEIA温度特性コードによって規定されています。Z5UとY5Vの誘電体は小型のパッケージで高い容量を実現するのに適していますが、図2と図3に示されているように、電圧係数と温度係数が大きくなる傾向があります。16V 10 μ FのY5Vコンデンサは、5Vのレギュレータに使用すると、加えられたこのDCバイアス電圧と動作温度範囲ではわずかに1 μ F~2 μ Fの実効値しか示さない可能性があります。X5RとX7Rの誘電体を使うともっと特性が安定し、出力コンデンサとして使うのに適しています。X7Rタイプは全温度範囲にわたって安定性が優れており、X5Rタイプは安価で、大きな値のものが入手可能です。X5RやX7Rのコンデンサを使う場合でも注意が必要です。X5RとX7Rのコードは動作温度範囲と全温度範囲での最大容量変化を規定するだけです。

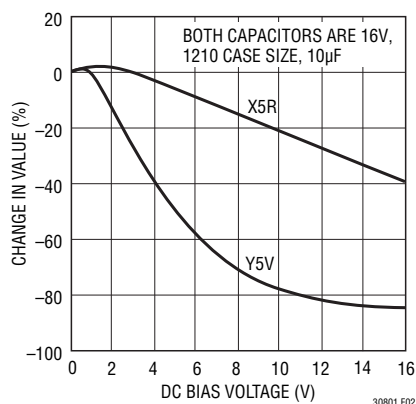


図2. セラミック・コンデンサのDCバイアス特性

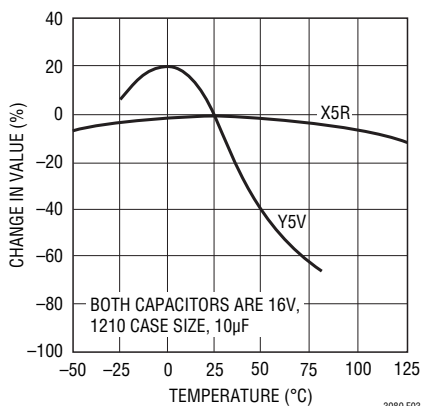


図3. セラミック・コンデンサの温度特性

X5RやX7RのコンデンサのDCバイアスによる容量変化はY5VやZ5Uのコンデンサに比べると小さいとはいえ、それでもコンデンサの容量が適切なレベルより下に下がってしまうほど変化することがあります。コンデンサのDCバイアス特性は部品のケース・サイズが大きいくほど良くなる傾向がありますが、動作電圧で期待する容量が保てるか検証すべきです。

電圧係数と温度係数だけが問題なのではありません。セラミック・コンデンサの中には圧電効果を示すものがあります。圧電デバイスは、圧電マイクロホンの動作原理と同様、機械的応力によって端子間に電圧を発生します。セラミック・コンデンサの場合、システムの振動や熱的過渡現象によって応力が生じることがあります。

デバイスの並列接続

LT3080-1を直接並列接続して高い出力電流を得ることができます。SETピンは一緒に結線し、INピンも一緒に結線します。これは3端子モードであろうが、別の入力電源が与えられていようが同じです。出力は共通に接続します。内部バラスト抵抗が電流を等しくします。

SETピンと出力の間のワーストケースのオフセットはわずかに ± 2 ミリボルトなので、非常に小さなバラスト抵抗を使うことができます。図4に示されているように、2個のデバイスは内部バラスト抵抗を有し、これは最大出力電流で90パーセントを超える均等な電流分担を与えます。

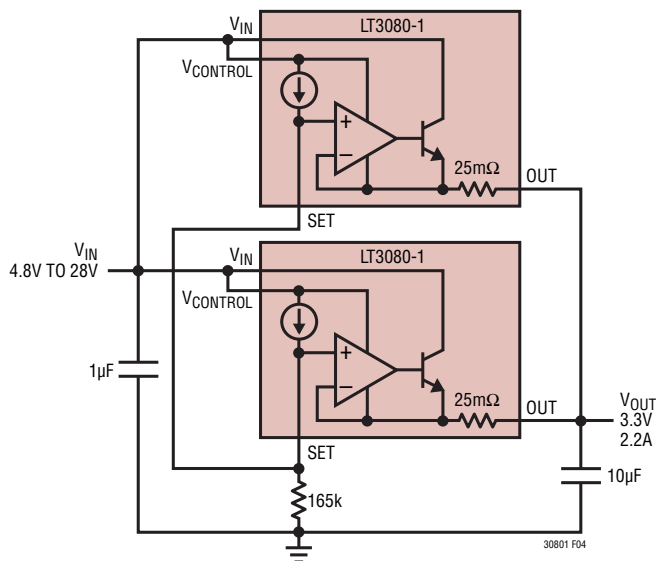


図4. 並列デバイス

30801fb

アプリケーション情報

(デバイス当たり)25ミリオームの内部抵抗による出力のレギュレーションの低下は2Aの出力で約25ミリボルトです。低い出力電圧(1V)では、これによりレギュレーションが2.5%増します。低い絶対誤差 $\pm 1.3\%$ を得るには出力を19mV高く設定することができます。もちろん、2個より多いLT3080-1を並列接続して、さらに大きな出力電流を得ることもできます。それらをPCボード上に分散配置し、熱を分散します。入力から出力への差が大きい場合、入力抵抗により熱をさらに分散することができます。

熱的性能

この例では、2個のLT3080-1の3mm×3mm DFNデバイスが1オンス銅の4層PCボードに実装されています。それらは約1.5インチ離して配置されており、基板は対流冷却のため垂直に実装されています。これらのデバイスの冷却性能と電流分担を測定するため、2つのテストが準備されました。

最初のテストは、入力から出力の電圧差が約0.7Vおよびデバイス1個当たり1Aで行われました。これにより、各デバイスの電力損失は700ミリワット、出力電流は2Aでした。周囲温度を超える温度上昇は約28°Cで、両方のデバイスの温度差は $\pm 1^\circ\text{C}$ 以内でした。これらのデバイスの熱的および電気的分担は両方とも非常に優れています。図5のサーモグラフは、これらのデバイスとPCボードの間の温度分布が、デバイスから約半インチ以内で周囲温度に達

していることを示しています。

次に、各デバイスを1.7Vにして電力を増やしました。これにより、各デバイスは1.7ワットの電力損失になり、図6に示されているように、デバイスの温度は約90°C、つまり周囲温度より65°C上になりました。この場合も、デバイス間の温度の一致は2°C以内で、両デバイス間のトラッキングが非常に優れていることを示しています。基板温度は各デバイスから約0.75インチ以内で約40°Cに達しました。

90°Cはこれらのデバイスの許容できる動作温度ですが、これは25°Cの周囲温度での値です。もっと高い周囲温度では、デバイスの温度が125°Cを超えるのを防ぐため、温度を制御する必要があります。デバイスを横切る3メートル/秒のエアフローは、デバイスの温度を約20°C下げ、高い動作周囲温度のためのマージンを与えます。

低電力レベルと比較的高い電力レベルの両方で、高い出力電流を得るためデバイスを並列に接続することができます。電流分担と熱分担が非常に優れており、基板上でピーク温度を過度の動作温度より下に保ちながら問題のない動作を実現できることを示しています。この手法により、リニア・レギュレーションを以前は使用できなかったシステムで、高い動作電流のリニア・レギュレーションを使用できるようになりました。

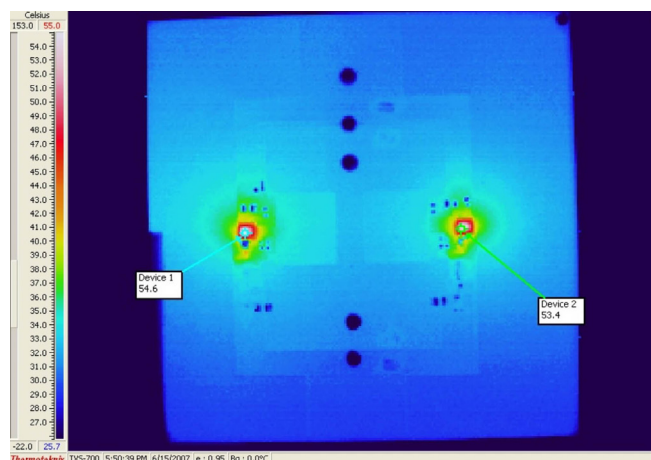


図5. 700mWを消費するときの温度上昇

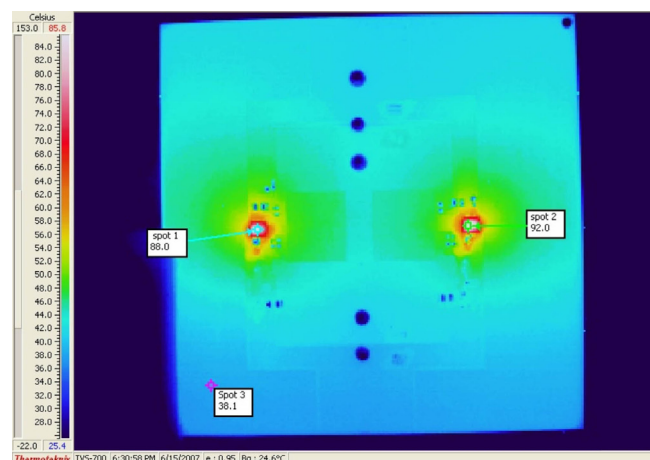


図6. 1.7Wを消費するときの温度上昇

アプリケーション情報

ノイズの抑制

LT3080-1はノイズ対策に関して多数の利点を備えています。リニア・レギュレータにはいくつかのノイズ源があります。どのLDOでも最も重要なノイズ源はリファレンスです。次に、誤差アンプのノイズの寄与を検討する必要があります。抵抗分割器の使用によって生じる利得も忘れることはできません。

従来の低ノイズ・レギュレータでは電圧リファレンスを（通常は大きな値の抵抗を通して）外部ピンに取り出しているため、それをバイパスしてリファレンス・ノイズを減らすことができます。LT3080-1は他のリニア・レギュレータのような従来の電圧リファレンスを使用せず、代わりにリファレンス電流を使います。この電流は標準 $3.2\text{pA}/\sqrt{\text{Hz}}$ （10Hz～100kHzの帯域幅で 1nA_{RMS} ）のノイズ・レベルで動作します。電圧ノイズはノイズ電流に抵抗値を乗じた積に等しくなります。抵抗は $\sqrt{4kTR}$ （ k = ボルツマン定数（ $1.38 \cdot 10^{-23} \text{ J/K}$ ）、 T は絶対温度）に等しいスポット・ノイズを発生し、それはリファレンス電流ノイズにRMSの和として加わります。リファレンス・ノイズを下げるには、電圧設定抵抗をコンデンサでバイパスすることができますが、これによりRC時定数に比例して起動時間が長くなります。

LT3080-1はSETピンからのユニティゲイン・フォロワを使って出力をドライブするので、出力電圧を設定するために抵抗を使う必要がありません。SETピンに置かれた高精度電圧リファレンスを使ってリファレンスの電流許容誤差と抵抗の許容誤差による出力電圧誤差を取り除きます。SETピンをアクティブにドライブすることはかまいません。回路設計者の創造性と独創性以外に制限はありません。

通常のリニア・レギュレータがリファレンスの電圧ノイズに関して遭遇する問題の1つは、通常のリファレンス電圧より高いレベルで動作させるために抵抗分割器を使うとき、出力とともにノイズが増幅されることです。LT3080-1では、ユニティゲイン・フォロワはSETピンから出力にかけてどんな利得も与えないので、ノイズ指

数は増加しません。誤差アンプのノイズは標準 $125\text{nV}/\sqrt{\text{Hz}}$ （10Hz～100kHzの帯域幅で $40\mu\text{V}_{\text{RMS}}$ ）です。これは、RMSとして加算されるもう1つの要素で、レギュレータの最終ノイズ指数を与えます。

「標準的性能特性」の曲線は、10Hz～100kHzの帯域幅のリファレンス電流と誤差アンプの両方のノイズ・スペクトル密度とピーク・トゥ・ピーク・ノイズ特性を示しています。

過負荷からの回復

多くのICパワー・レギュレータと同様、LT3080-1には安全な動作領域（SOA - Safe Operating Area）の保護が備わっています。SOA保護により、入力から出力への電圧が増加するにつれて電流制限が減少し、入力から出力の全ての電圧値に対して電力損失を安全なレベルに保ちます。LT3080-1は、デバイスが降伏するまでの入力から出力への全ての電圧値でいくらかの出力電流を供給します。「標準的性能特性」のセクションの「電流制限」の曲線を参照してください。

電源が最初にオンすると、入力電圧が上昇し、出力が入力に追従するので、レギュレータは非常に重い負荷に対して起動することができます。起動時に入力電圧が上昇しているとき、入力から出力への電圧差が小さいので、レギュレータは大きな出力電流を供給することができます。入力電圧が高いと、出力の短絡状態を取り除いても出力電圧が回復しないという問題が起きる可能性があります。LT1085やLT1764Aなど他のレギュレータもこの現象を示し、LT3080-1に固有の問題ではありません。

この問題は、入力電圧が高く出力電圧が低いとき、重い出力負荷で発生します。共通の状況は短絡を取り去った直後です。このような負荷の負荷曲線は出力電流曲線と2点で交わる可能性があります。これが起きると、レギュレータの安定な動作点が2個存在します。このように2つの交点があると、出力を回復するために、入力電源を一旦ゼロにして再度立ち上げることが必要になることがあります。

アプリケーション情報

負荷レギュレーション

LT3080-1はフローティング・デバイスなので(デバイスにはグランド・ピンがなく、全ての消費電流とドライブ電流が負荷に供給されます)、真のリモート負荷検出を行うことは不可能です。負荷レギュレーションはレギュレータと負荷の間の接続の抵抗によって制限されます。データシートの負荷レギュレーションの仕様はパッケージのピンでケルビン検出されます。負側の検出は真のケルビン接続で、電圧設定抵抗の下側が負荷の負側に戻されます(図7を参照)。示されているように接続されると、システムの負荷レギュレーションはLT3080-1の負荷レギュレーションと寄生ライン抵抗に出力電流を乗じた積の和になります。レギュレータと負荷の間の正接続をできるだけ短くし、大きなワイヤーまたはPCボードのトレースを使うことが重要です。

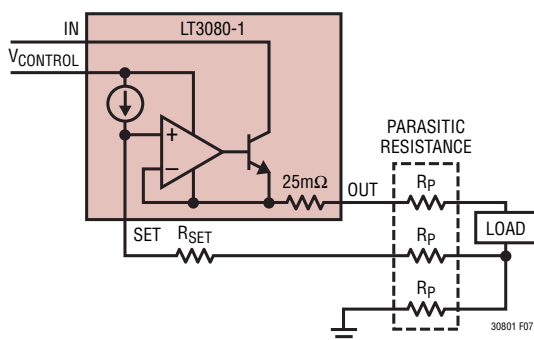


図7. 最良の負荷レギュレーションのための接続

内部25mΩバラスト抵抗はLT3080-1の帰還ループの外側にあります。したがって、バラスト抵抗両端の電圧降下は追加のDC負荷レギュレーションとして現れます。ただし、この追加の負荷レギュレーションはピーク・トゥ・ピーク出力電圧変動を減らすことによって実際に過渡応答性能を改善することができ、総出力容量を節約することさえできます。この手法はアクティブ電圧ポジショニングと呼ばれ、出力負荷電流の大きな過渡に耐える必要のあるアプリケーションに特に有用です。詳細については、デザインノート224「出力コンデンサを減らすアクティブ電圧ポジショニング」を参照してください。基本原理として、出力電圧は出力負荷電流の関数であるという事実を利用します。出力電圧は出力負荷電流範囲の midpoint に基づいて設定されます。

$$\frac{1}{2} \cdot (I_{OUT(MIN)} + I_{OUT(MAX)})$$

出力電流が midpoint より下に減少するにつれ、出力電圧は公称設定ポイントより上に増加します。逆に、出力電流が midpoint より上に増加するにつれ、出力電圧は公称設定ポイントより下に減少します。大きな出力負荷過渡の間、出力電圧の乱れは、アクティブ電圧ポジショニングが採用されていない場合そうなるであろうよりも狭いウィンドウ内に閉じ込められます。次式を使ってSETピンの抵抗値を選択します。

$$R_{SET} = \frac{(V_{OUT} + I_{MID} \cdot R_{BALLAST})}{I_{SET}}$$

ここで、

$$I_{MID} = 1/2 (I_{OUT(MIN)} + I_{OUT(MAX)})$$

$$R_{BALLAST} = 25m\Omega$$

$$I_{SET} = 10\mu A$$

熱に関する検討事項

LT3080-1は過負荷状態でデバイスを保護するように設計された電力と熱の制限回路を内蔵しています。連続通常負荷条件では、最大接合部温度を超えてはいけません。接合部から周囲までの全ての熱抵抗源について検討することが重要です。これには接合部からケース、ケースからヒートシンク・インタフェース、ヒートシンク抵抗または回路基板からアプリケーションに支配される周囲温度が含まれます。近く他の熱源についても検討する必要があります。

表面実装デバイスの場合、PCボードとその銅トレースの熱拡散能力を使ってヒートシンクを実現します。パワー・デバイスの発生する熱を拡散するのに、表面実装型ヒートシンクとメッキ・スルーホールを使うこともできます。

接合部からケースの熱抵抗はICの接合部からダイの直下のケース底面までで規定されています。これは熱流の最低抵抗経路です。パッケージのこの領域からヒートシンク材へ可能な限り最良の熱流を保証するには適切な実装が必要です。露出パッドが出力に電氣的に接続されることに注意してください。

アプリケーション情報

一定のボード寸法が与えられたときいくつか異なる銅面積に対する2つの異なるパッケージの熱抵抗を以下の表に示します。全ての測定は、静止空気中で、1オンス銅の両面1/16" FR-4基板で行いました。

表1. MSEパッケージ、8ピンMSOP

銅面積		基板面積	熱抵抗 (接合部から周囲)
トップサイド*	バックサイド		
2500mm ²	2500mm ²	2500mm ²	55°C/W
1000mm ²	2500mm ²	2500mm ²	57°C/W
225mm ²	2500mm ²	2500mm ²	60°C/W
100mm ²	2500mm ²	2500mm ²	65°C/W

*デバイスはトップサイドに実装。

表2. DDパッケージ、8ピンDFN

銅面積		基板面積	熱抵抗 (接合部から周囲)
トップサイド*	バックサイド		
2500mm ²	2500mm ²	2500mm ²	60°C/W
1000mm ²	2500mm ²	2500mm ²	62°C/W
225mm ²	2500mm ²	2500mm ²	65°C/W
100mm ²	2500mm ²	2500mm ²	68°C/W

*デバイスはトップサイドに実装。

PCBの層数、銅重量、基板レイアウトおよびサーマル・ビアが熱抵抗に影響を与えます。表1と表2には、1オンス銅の2層基板の熱抵抗の数値が与えられていますが、最新の多層PCBはこれらの表の数値より良い性能を与えます。たとえば、DFNまたはMSOPの露出バックサイド・パッドから(V_{OUT}に接続された)内部層に5個のサーマル・ビアを設けた4層の1オンス銅PCB基板は40°C/Wの熱抵抗を達成します。デモ回路995Aの基板レイアウトはこの40°C/Wの性能を達成します。これは表1と表2に示されている数値より約33%改善されています。

接合部温度の計算

例：出力電圧が0.9V、V_{CONTROL}電圧が3.3V±10%、I_N電圧が1.5V±5%、出力電流範囲が1mA～1A、最大周囲温度が50°Cだとすると、上面銅領域が500mm²の2500mm²の基板のDFNパッケージの場合の最大接合部温度はいくらになるでしょうか。

ドライブ回路の電力は次のようになります。

$$P_{DRIVE} = (V_{CONTROL} - V_{OUT})(I_{CONTROL})$$

ここで、I_{CONTROL}はI_{OUT}/60に等しく、I_{CONTROL}は出力電流の関数です。「I_{CONTROL}とI_{OUT}」の曲線が「標準的性能特性」のセクションに示されています。

出力トランジスタの電力は次のようになります。

$$P_{OUTPUT} = (V_{IN} - V_{OUT})(I_{OUT})$$

全電力は次のようになります。

$$P_{TOTAL} = P_{DRIVE} + P_{OUTPUT}$$

SETピンに供給される電流は微小であり、無視できます。

$$V_{CONTROL(MAX CONTINUOUS)} = 3.630V (3.3V + 10\%)$$

$$V_{IN(MAX CONTINUOUS)} = 1.575V (1.5V + 5\%)$$

$$V_{OUT} = 0.9V, I_{OUT} = 1A, T_A = 50^\circ C$$

これらの条件での電力損失は以下のようになります。

$$P_{DRIVE} = (V_{CONTROL} - V_{OUT})(I_{CONTROL})$$

$$I_{CONTROL} = \frac{I_{OUT}}{60} = \frac{1A}{60} = 17mA$$

$$P_{DRIVE} = (3.630V - 0.9V)(17mA) = 46mW$$

$$P_{OUTPUT} = (V_{IN} - V_{OUT})(I_{OUT})$$

$$P_{OUTPUT} = (1.575V - 0.9V)(1A) = 675mW$$

$$\text{全電力損失} = 721mW$$

接合部温度は次のようになります。

$$T_J = T_A + P_{TOTAL} \cdot \theta_{JA} \text{ (表を使って近似)}$$

$$T_J = 50^\circ C + 721mW \cdot 64^\circ C/W = 96^\circ C$$

この場合、接合部温度は最大定格より低く、信頼性の高い動作が保証されます。

アプリケーション情報

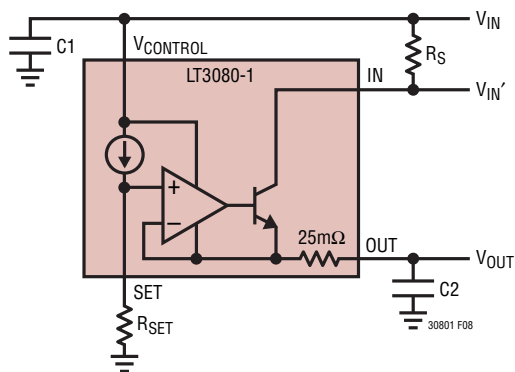


図8. 直列抵抗を使った電力損失の削減

電力損失の削減

アプリケーションによっては、出力電流能力を犠牲にすることなく、LT3080-1パッケージ内の電力損失を減らす必要があることがあります。2つの手法を使うことができます。図8に示されている最初の手法では、レギュレータの入力に直列に抵抗を使います。RS両端の電圧降下により、LT3080-1のINからOUTへの電圧差が減少し、それに依りてLT3080-1の電力損失が減少します。

一例として、VIN = VCONTROL = 5V、VOUT = 3.3VおよびIOUT(MAX) = 1Aと仮定します。前に説明した「接合部温度の計算」のセクションの式を使います。

直列抵抗RSがないと、LT3080-1の電力損失は次のようになります。

$$P_{TOTAL} = (5V - 3.3V) \cdot \left(\frac{1A}{60}\right) + (5V - 3.3V) \cdot 1A = 1.73W$$

NPNパス・トランジスタ両端の電圧差(VDIFF)を0.5Vとして選択すると、RSは次のようになります。

$$R_S = \frac{5V - 3.3V - 0.5V}{1A} = 1.2\Omega$$

LT3080-1内の電力損失はの場合次のようになります。

$$P_{TOTAL} = (5V - 3.3V) \cdot \left(\frac{1A}{60}\right) + (0.5V) \cdot 1A = 0.53W$$

LT3080-1の電力損失は、直列抵抗がない場合に比べて、この場合わずか30%です。RSは1.2Wの電力を消費します。この電力を適切に処理して消費できる適当なワット数の抵抗を選択します。

図9に示されている電力損失削減の2番目の手法では、LT3080-1と並列に抵抗が使われます。この抵抗は電流に並列経路を与え、LT3080-1を通して流れる電流を減らします。この手法は、入力電圧がほどよく一定で、出力負荷電流の変化が小さければうまく動作します。また、この手法は、最小負荷の要件を代償にして、利用できる最大出力電流を増やします。

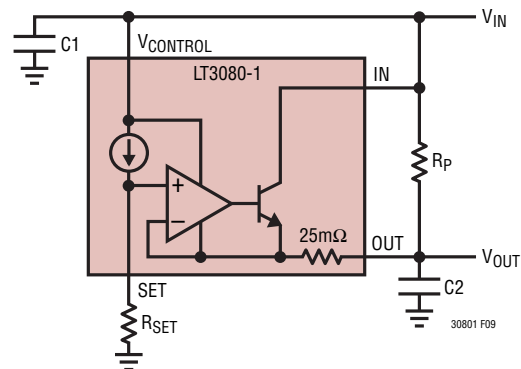


図9. 並列抵抗を使った電力損失の削減

一例として、VCONTROL = 5V、VIN(MAX) = 5.5V、VOUT = 3.3V、VOUT(MIN) = 3.2V、IOUT(MAX) = 1AおよびIOUT(MIN) = 0.7Aと仮定します。また、Rpを流れる電流はIOUT(MIN)の90%(630mA)を超えないと仮定します。

Rpを計算すると次のようになります。

$$R_p = \frac{5.5V - 3.2V}{0.63A} = 3.65\Omega$$

(5%標準値 = 3.6Ω)

最大全電力損失は(5.5V - 3.2V)・1A = 2.3Wです。ただし、LT3080-1は次の電流しか供給しません。

$$1A - \frac{5.5V - 3.2V}{3.6\Omega} = 0.36A$$

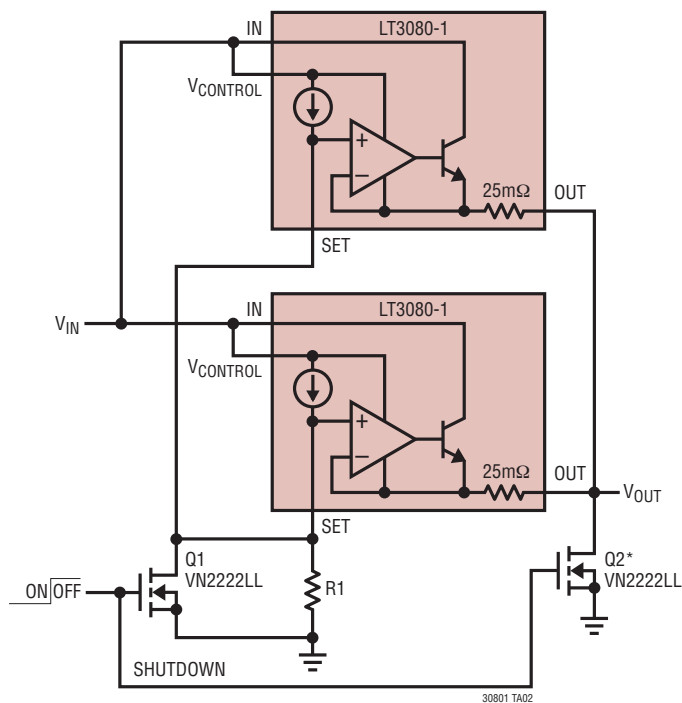
したがって、LT3080-1の電力損失は次のとおりわずかです。

$$P_{DIS} = (5.5V - 3.2V) \cdot 0.36A = 0.83W$$

Rpは1.47Wの電力を消費します。最初の手法の場合と同様、この電力を適切に処理して消費できる適当なワット数の抵抗を選択します。この構成では、LT3080-1はわずか0.36Aを供給します。したがって、LT3080-1をその通常の動作範囲に保ちながら、負荷電流を0.64A増やし、1.64Aにすることができます。

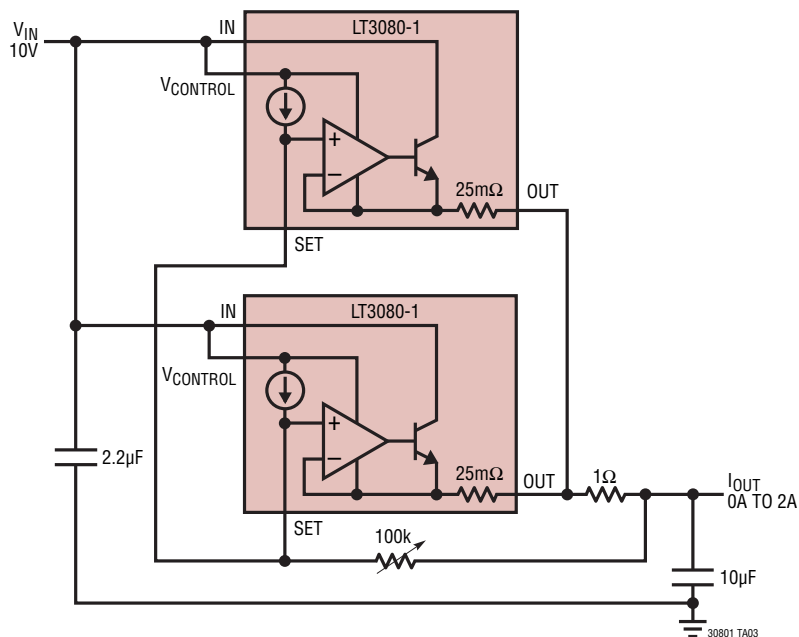
標準的応用例

シャットダウンの追加



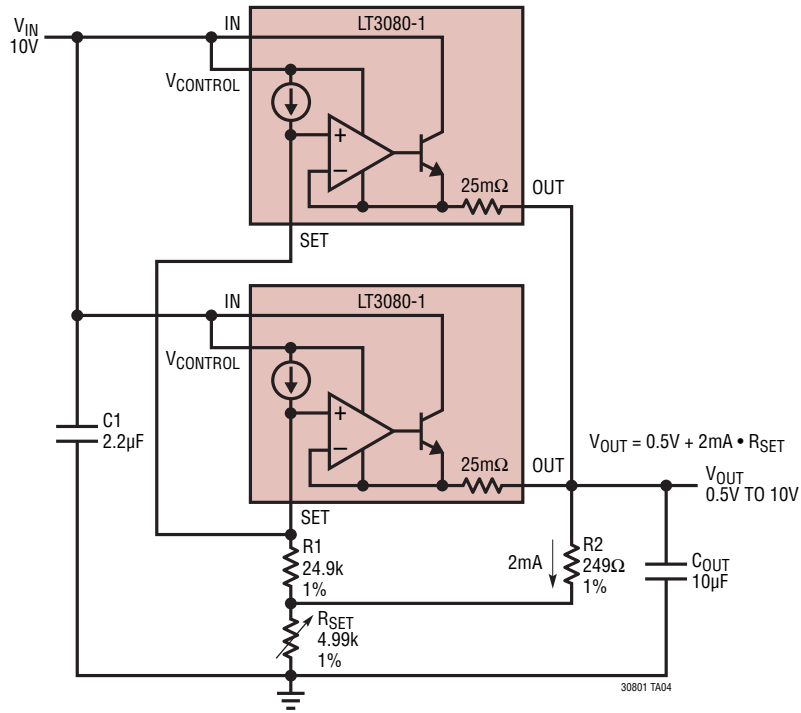
* 出力に負荷が存在しないとき
Q2がゼロ出力を保证する

電流源

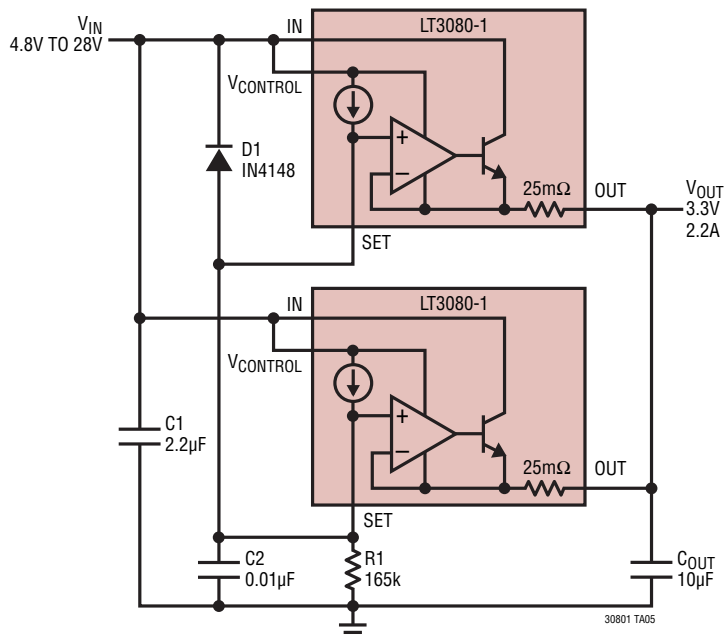


標準的応用例

値の小さなSET抵抗を使用

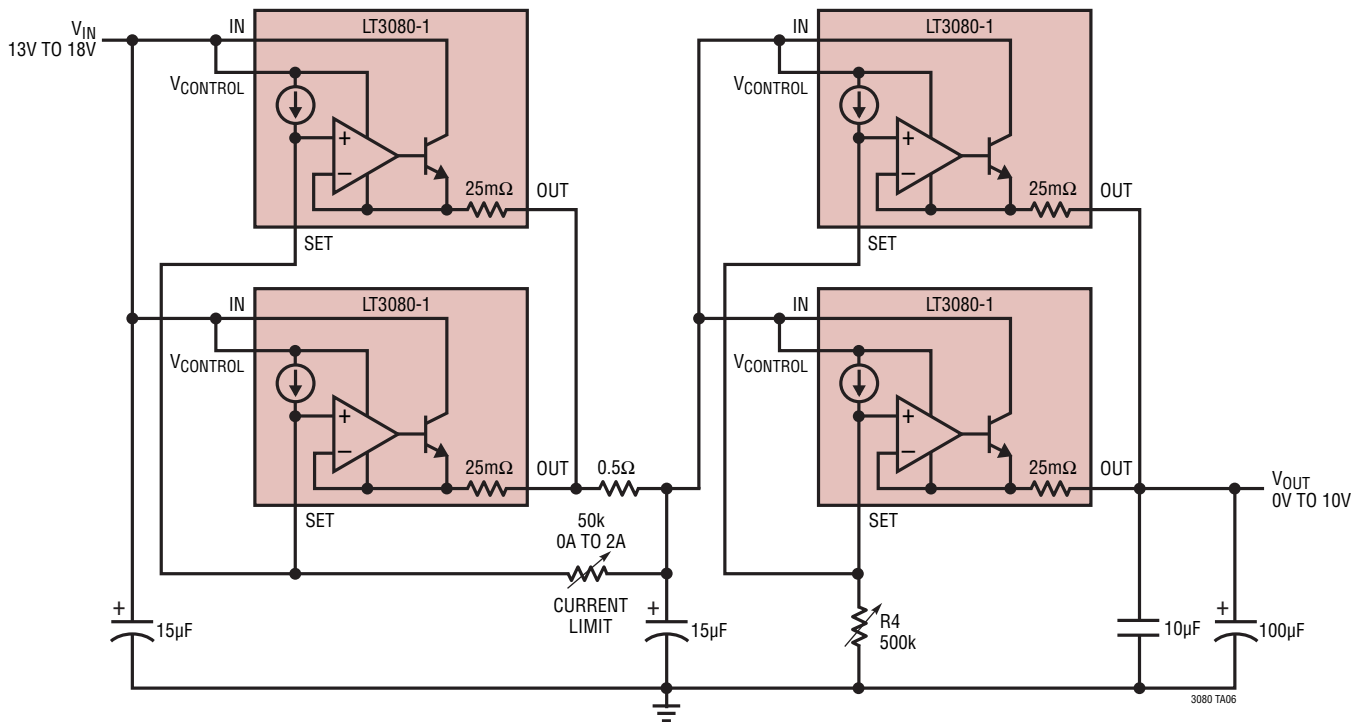


ソフトスタートの追加

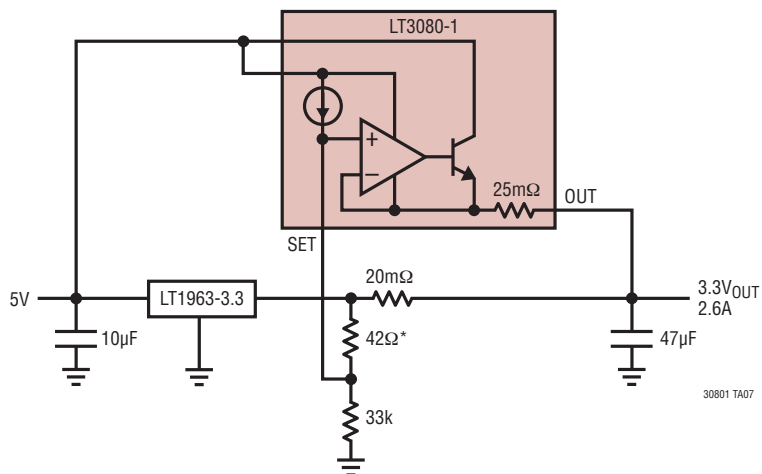


標準的応用例

ラボ用電源



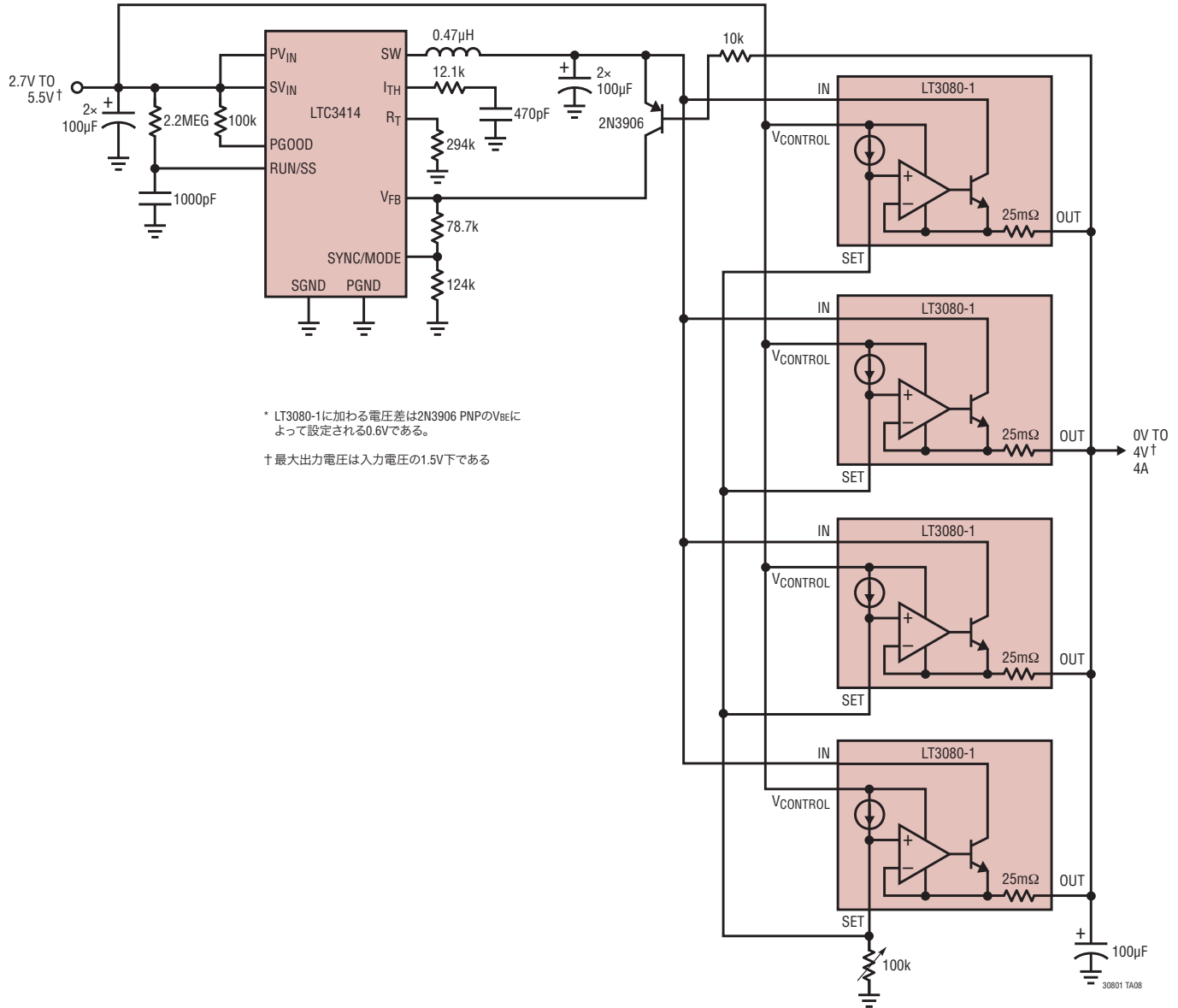
固定出力レギュレータの増強



*無負荷時に4mVの降下でLT3080-1がオフするようにする
複数のLT3080-1を並列に使用可能

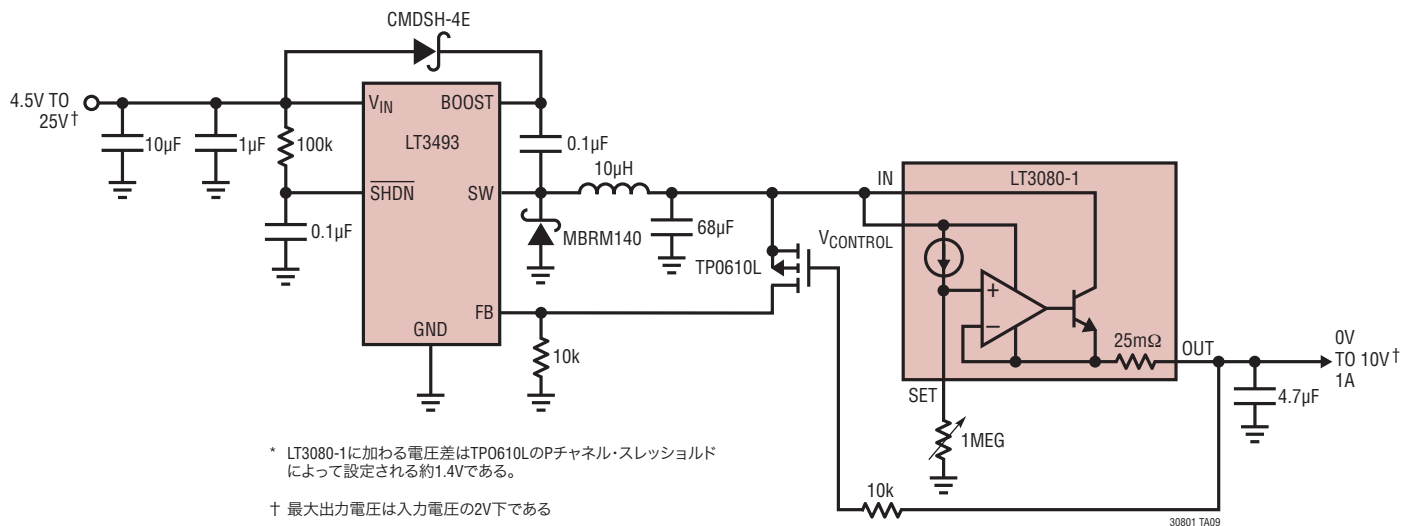
標準的応用例

低電圧、高電流、調節可能な高効率レギュレータ*

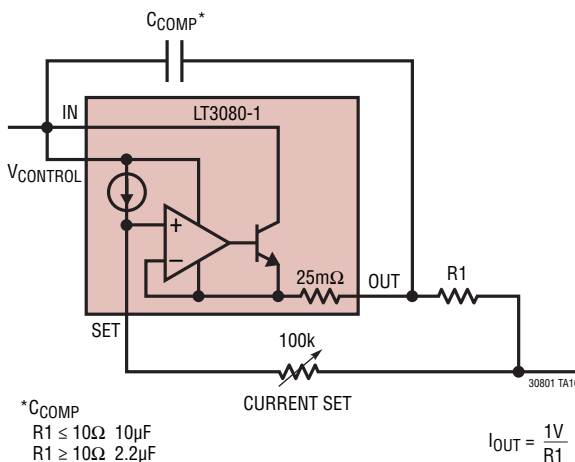


標準的応用例

調節可能な高効率レギュレータ*



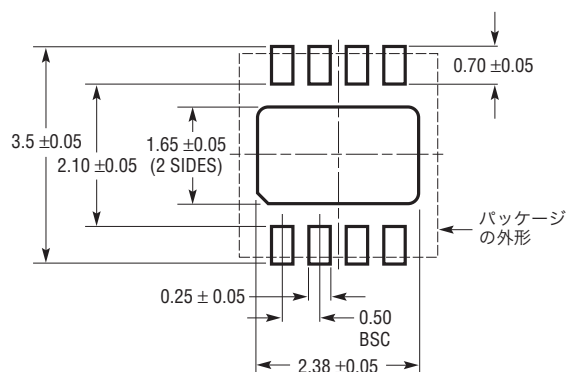
2端子電流源



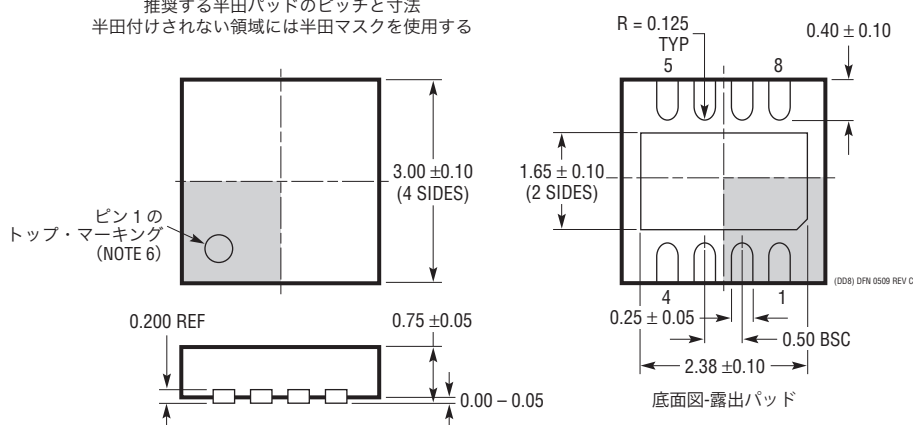
パッケージ

最新のパッケージ図面については、<http://www.linear-tech.co.jp/designtools/packaging/> をご覧ください。

DDパッケージ
8ピン・プラスチックDFN (3mm×3mm)
 (Reference LTC DWG # 05-08-1698 Rev C)



推奨する半田パッドのピッチと寸法
 半田付けされない領域には半田マスクを使用する



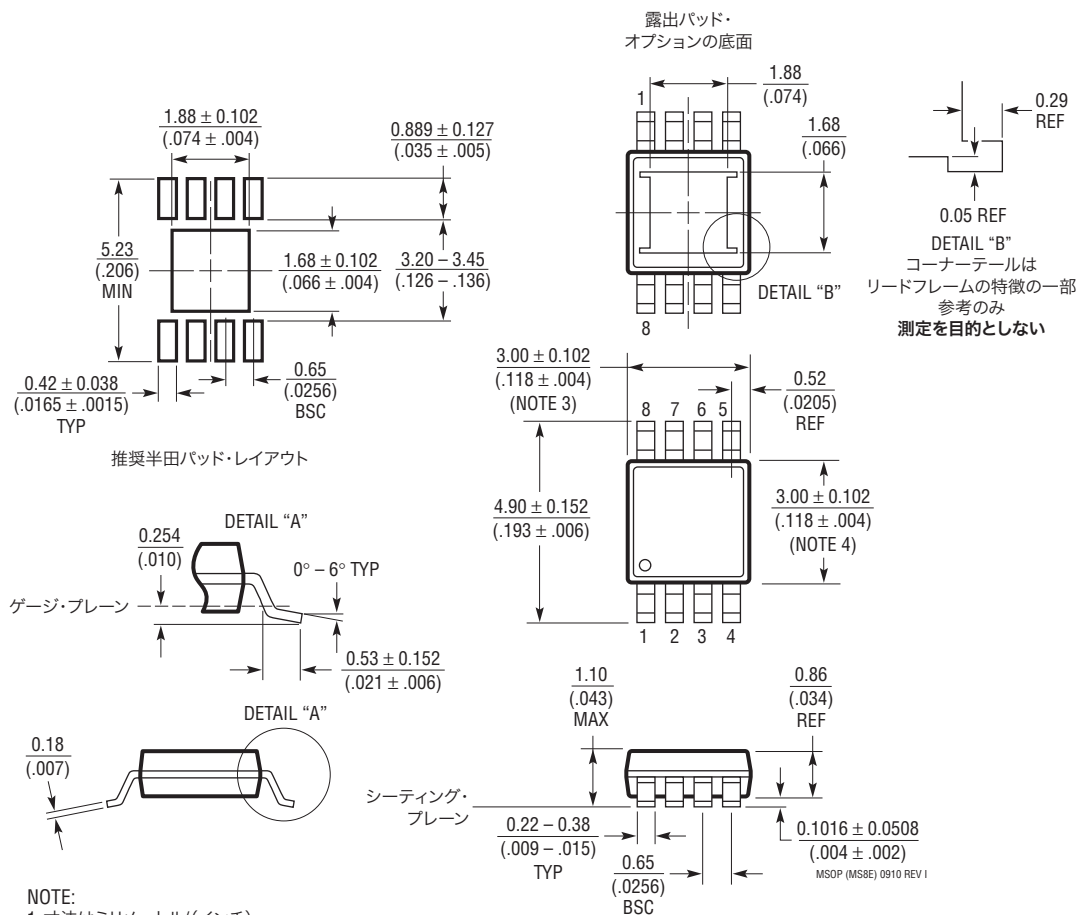
NOTE:

1. 図はJEDECのパッケージ外形M0-229のバリエーション (WEED-1) になる予定
2. 図は実寸とは異なる
3. 全ての寸法はミリメートル
4. パッケージ底面の露出パッドの寸法にはモールドのバリを含まない
 モールドのバリは (もしあれば) 各サイドで0.15mmを超えないこと
5. 露出パッドは半田メッキとする
6. 網掛けの部分はパッケージの上面と底面のピン1の位置の参考に過ぎない

パッケージ

最新のパッケージ図面については、<http://www.linear-tech.co.jp/designtools/packaging/> をご覧ください。

MS8Eパッケージ
8ピン・プラスチックMSOP
 (Reference LTC DWG # 05-08-1662 Rev 1)



NOTE:

1. 寸法はミリメートル/(インチ)
2. 図は実寸とは異なる
3. 寸法にはモールドのバリ、突出部、またはゲートのバリを含まない
モールドのバリ、突出部、またはゲートのバリは、各サイドで0.152mm (0.006")を超えないこと
4. 寸法には、リード間のバリまたは突出部を含まない
リード間のバリまたは突出部は、各サイドで0.152mm (0.006")を超えないこと
5. リードの平坦度 (成形後のリードの底面) は最大0.102mm (0.004")であること
6. 露出パッドの寸法にはモールドのバリを含まない
露出パッドのモールドのバリは各サイドで0.254mm (0.010")を超えないこと

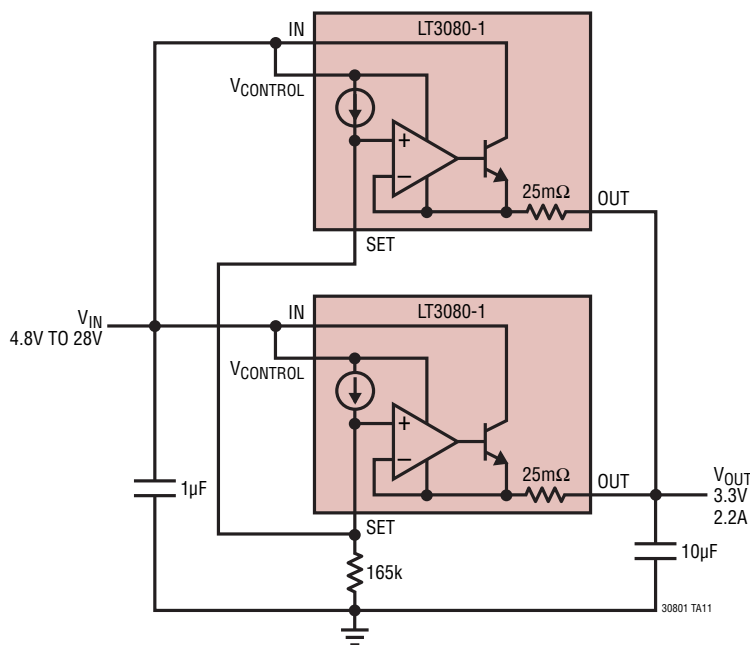
改訂履歴 (Rev Bよりスタート)

REV	日付	概要	ページ番号
B	9/11	「絶対最大定格」と「発注情報」を更新、「電気的特性」セクションのNote2にIグレードを追加	2,3

LT3080-1

標準的応用例

レギュレータの並列接続



関連製品

製品番号	説明	注釈
LDO		
LT1086	1.5A低損失レギュレータ	2.85V、3.3V、3.6V、5Vおよび12Vの固定出力
LT1117	800mA低損失レギュレータ	1Vのドロップアウト、調節可能な出力または固定出力、DD-PakとSOT-223のパッケージ
LT1118	800mA低損失レギュレータ	シンクとソースの両方可、S0-8とSOT-223のパッケージ
LT1963A	1.5A低ノイズ高速過渡応答LDO	ドロップアウト電圧: 340mV、低ノイズ = 40µVRMS、V _{IN} : 2.5V~20V、TO-220、DD、SOT-223およびSO-8パッケージ
LT1965	1.1A低ノイズLDO	ドロップアウト電圧: 290mV、低ノイズ = 40µVRMS、V _{IN} : 1.8V~20V、V _{OUT} : 1.2V~19.5V、セラミック・コンデンサで安定、TO-220、DDPak、MSOPおよび3mm × 3mm DFNパッケージ
LTC®3026	1.5A低入力電圧VLDO™レギュレータ	V _{IN} : 1.14V~3.5V (昇圧をイネーブル)、1.14V~5.5V (外部5Vを使用)、V _{DO} = 0.1V、I _Q = 950µA、10µFのセラミック・コンデンサで安定、10ピンMSOPとDFN-10のパッケージ
LT3080	並列接続できる1.1A、低ノイズ、低ドロップアウト・リニア・レギュレータ	ドロップアウト電圧: 300mV (2電源動作)、低ノイズ: 40µVRMS、V _{IN} : 1.2V~36V、V _{OUT} : 0V~35.7V、電流ベースのリファレンス、抵抗1個でV _{OUT} を設定、直接並列接続可能 (オペアンプ不要)、セラミック・コンデンサで安定、TO-220、SOT-223、MSOPおよび3mm × 3mm DFNパッケージ
スイッチング・レギュレータ		
LTC3414	4A (I _{OUT})、4MHz同期整流式降圧DC/DCコンバータ	効率: 95%、V _{IN} : 2.25V~5.5V、V _{OUT(MIN)} = 0.8V、TSSOPパッケージ
LTC3406/LTC3406B	600mA (I _{OUT})、1.5MHz同期整流式降圧DC/DCコンバータ	効率: 95%、V _{IN} : 2.5V~5.5V、V _{OUT(MIN)} = 0.6V、I _Q = 20µA、I _{SD} < 1µA、ThinSOT™パッケージ
LTC3411	1.25A (I _{OUT})、4MHz同期整流式降圧DC/DCコンバータ	効率: 95%、V _{IN} : 2.5V~5.5V、V _{OUT(MIN)} = 0.8V、I _Q = 60µA、I _{SD} < 1µA、10ピンMSEまたはDFNパッケージ

30801fb